

資料

保育系学生の「保育士志望」の背景にあるものは何か

An Analysis of the Potential Motives for Students Pursuing a Child Care

Occupation

大久保 義美

Yoshimi OKUBO

愛知みずほ大学短期大学部

Aichi Mizuho Jr.College

Key words : 保育士、アイデンティティ・ステイタス、職場体験、準備性、3歳児神話

The present paper looks into the reasons why students in the department of early childhood nursing apply to be child care workers, and further into the potential motives they would have from their backgrounds. Taking junior college students in the early childhood nursing department as main subjects, and students in the school health caring department and the department of nutrition from the same college as comparison groups, the research has been conducted.

The research is based on the questionnaires and interviews. The questionnaires asked for following information: 1) an ideal occupation in their lower grades, upper grades, junior high school, and high school ages 2) a figure who had the most impact on their career path selection 3) their views for the idea saying that children should be taken care of by mothers' hands until the age of three 4) their study habits at junior high and high school 5) their workplace experience or volunteer experience at nursery schools or kindergartens 6) their typical career after graduation. The interviews were for those who are going to enter the early childhood nursing department and about their previous experience of playing the piano.

This investigation presents that 1) students in the early childhood nursing department, in most cases, belong to either identity diffusion or identity moratorium of the four stages in *Marcia's* identity status and are mentally unready to be child care workers as their occupation although they wish to be one 2) students of any stage in *Marcia's* identity status are greatly influenced by the workplace experience or volunteer experience at nursery schools or kindergartens, with which point they make a decision to be child care workers 3) their teachers at high school had the most impact on their career path selection, followed by mothers, and fathers 4) considering their previous experience of playing the piano and study habits at high school as indicators to measure their readiness, there are a fairly large number of students entering the early childhood nursing department being not ready

enough 5) between students in the early childhood nursing department and students in other departments, there is a remarkable difference in responding to the question asking if children should be taken care of by mothers' hands in their houses until the age of three, what is called "till-3-year-old" myth. While most of the students in the school health caring department and the department of nutrition answered that the mother should be the one who gives care to her child until the age of three, more than 70 percent of students in the early childhood nursing department answered that they were not sure if the mother should be the one. It is still not clear if that is because students with this view tend to enter the early childhood nursing department or because what they learn during the course such as social care services for children gives them this kind of view.

Key words : child care worker, identity status, workplace experience, readiness, "till-3-year-old" myth

1. はじめに

保育士は女の子に大変人気の高い職業である。小学校1年生女子では「おとなになったらなりたい職業」の第5位（株式会社クラレ、2015）¹⁾、小学校卒業時では第7位（株式会社クラレ、2014）²⁾、高校生では堂々の第1位（幼稚園教諭を含む）（ベネッセ教育総合研究所、2009）³⁾、性別を問わない投稿サイト（13歳のハローワーク公式サイト、2015）⁴⁾でも男女合わせた中で10位である。また女の子本人だけでなく、親にも人気が高い。例えば小学校1年生女子の親の「将来、子どもに就いて欲しい職業」の第7位、小学校6年生女子の親でも第7位である（株式会社クラレ、2014、2015）。

このように保育士は女の子にもその親にも人気の高い職業であるが、男の子とその親にはあまり人気がなく「男の子のなりたい職業ランキング」には見当たらない。近年男性保育士は大幅増加しており、2015年現在では、現場で働く保育士のうち5%に達しており（総務省統計局、2011）⁵⁾、男性保育士の世話になった子どもたちも多いはずである。それにも関わらず「なりたい職業ランキング」の20位まで辿っても現れないのは、保育士がまだまだ女性色の強い職業と見られているからであろうか。

さて女の子とその親に人気の高い職業である保育士であるが、保育園入所を望む人が増えているにも関わらず十分な入所定員がなく入れないという「待機児童」が増え、国を挙げて保育士養成に力を入れるようになった。このような時流も、高校生の保育系進学に無縁ではないと思われる。

本研究の第1の問題は、このような時代——すなわち保育士が女の子に人気の仕事であり、社会もまた保育士の増加を求める時代——において、保育系短大に進学した女子学生たちは、本当に職業として保育士を

選ぶという決断をして進学して来たのか、ということである。そして、入学前に保育系の勉学に必要な最小限の準備ができていたのだろうか。これらの問題について、ひとつはマーシャ（Marcia, J. E.、1966）⁶⁾のアイデンティティ・ステータスという点から考えてみたい。

生涯発達について研究したエリクソン（Erikson, E. H. 1950）⁷⁾は、アイデンティティの達成こそ青年期の重要な発達課題だと述べている。アイデンティティとは「自分とは何者であるかという自己定義、あるいは自分自身はこの社会の中でどう生きているのだという実感、存在意義」（無藤、1979）⁸⁾、そして「どんな職業についたらよいのか」について迷いつつ悩みつつも見出して行くことは、アイデンティティ達成に至る重要な部分であると考えた。

マーシャはアイデンティティの達成までにはいくつかの段階があると考えて4つのアイデンティティ・ステータスを提唱した。マーシャのいう4つのステータスとは以下の通りである。

①アイデンティティ達成：迷い悩みながらもいくつかの可能性について真剣に考えた末、自分自身の解決を見出し、それに基づいて行動している。自分の意志で生き方、職業などを選び、この選択に関して自ら責任を持って、その実現に向かって努力しようとしている段階。

②モラトリアム：自分はどんな職業に就きたいのか、どんな人生を生きて行きたいのか、あれかこれかまだ迷っている段階。

③フォークロージャー（早期完了）：「幼い頃から大人になったらなりたいもの」が決まっており、周りの大人からも受け入れられて来ているので迷いが無い。

④アイデンティティ拡散：過去において危機を経験している、または経験していないどちらの場合でも、どのような職業につくか、自分はどのような生き方をするかなどの自分の進路や生き方についての目標をまったく持っていない段階。

本研究では保育系学生がどのステイタスにいるのか、言い換えると「保育士」を自分の人生の職業としてどの程度のとらえ方をしているのか、を検討する。

第2に、どのような経験が、あるいはどのような人物のことが保育系進学を決断を促したのかについても考えていきたい。

第3に、短大に進学する前に、保育系の勉学に最低限必要な心身の準備が出来ていたのかを検討する。

第4に、「3歳児までは母親の手で育てるべきである」という考え方、いわゆる「3歳児神話」について保育系の学生がどうとらえているのかを見る。「3歳児神話」とは、子どもは3歳頃まで母親自身の手で育てないとその子どもに悪い影響があるという考えを指している。この考え方はアカゲザルの仔を用いた研究から導き出されたものであった（Harlow, H. F., 1958⁹⁾、1971¹⁰⁾）。これを統計学的に否定する研究が現れないまま一人歩きしてしまったものが「3歳児神話」である。科学的根拠がないにもかかわらず多くの人が信じるという意味で「神話」と呼ばれてきた。「3歳児神話」に取り組んできた大日向によると以下のような要素からなるという（大日向、1988）¹¹⁾。

- (a) 子どもの成長にとって幼少期が重要である。
- (b) この大切な時期は生みの母親が養育に専念しなければならない、なぜならお腹を痛めたわが子に対する母の愛情は子どもにとって最善だからである。
- (c) 母親が就労などの理由で育児に専念しないと、将来子どもの発達に悪い影響を残す場合がある。

この考え方は現在多くの研究から否定されており（大日向、1988；日本子ども学会、2009¹²⁾ 他）、また5年間の追跡調査から「母親といる時間数よりも質が重要」との結論が得られている（厚生労働省、2000）¹³⁾。それに関わらず、「3歳児までは（とにかく）母親の手で」と信じる人は少なからず存在する。保育士を目指す学生たちが「3歳児神話」をどう受け止めているのかを検討したい。

2. 目的

保育系学生はなぜ保育系に進学したのか、その背景を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

(1) 調査対象者

A県N市のA女子短期大学1年生。保育士コース26

名、養護教諭コース16名、栄養士コース12名の計54名であった。

(2) 調査方法と内容

A. 質問紙調査

対象者全員が何らかの教員免許取得希望者（保育士コース：保育士資格＋幼稚園教諭、養護教諭コース：養護教諭、栄養士コース：栄養士＋栄養教諭）である。質問紙は教員免許必修科目「教育心理学」の授業後に実施した。内容は対象者全員に対して、①「大人になったらなりたいたいと思っていた職業」について1問、②「保育系／養護教諭コース／栄養士コースに進学するという決断に影響のあった人」について1問、③「3歳児神話」について1問、④中学校・高校時代の高校時代の家庭学習について1問、の計4問を尋ねた。また保育士コースの学生に対しては、さらに⑤「保育園／幼稚園でのボランティア／職場体験」について2問、⑥「卒業後の代表的進路に対する気持ち」についての1問、の計3問を追加した。したがって、養護教諭コースと栄養士コースの学生は4問、保育士コースの学生は7問の質問を受けたことになる。回答所要時間は10～15分であった。

B. 保育士コース学生の入学前のピアノ経験について
音楽担当講師による、入学前聞き取り調査データを用いた。

4. 結果と考察

(1) 保育系学生の「保育士志望」についてのアイデンティティ・ステータス

質問への回答の結果から、マーシャのいう4つのアイデンティティ・ステイタスにしたがって、保育士コースの学生の分類を試みた。

まず、4つの時期（小学校低学年・高学年・中学校時代・高校時代）について、「大人になったらなりたいたいと思っていた職業」について、「あった」「無かった」「覚えていない」の3択から選ぶこと、次に「あった」場合にはなりたかった順に最大3つまで書くことを求めた。結果はFigure 1の通りである。

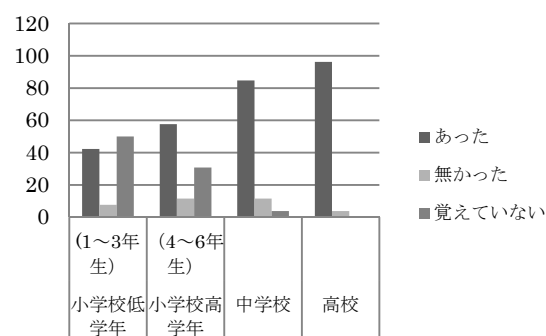


Figure1 大人になったらなりたいたい職業

これによると、小学校低学年では「なりたい職業があった」のは半数以下であるが、年齢と共に増えていき中学時代や高校時代になると8割以上が「あった」と答えている。児童期から青年期へ成長し、職業というものへの関心が高まってきた様子が示されている。

次にアイデンティティ・ステイタスという点から見る。本研究では以下の基準で学生個人のアイデンティティ・ステイタスを特定した。

- ①アイデンティティ達成：中学校までは保育士を含む複数の職業が見られるが、高校時代になると保育士のみが記入されている。
- ②モラトリウム：高校時代になると職業は絞られ、保育士を含む2つになる。
- ③フォークロージャー（早期完了）：4つの時期すべてに「保育士」が記入されている。他の職業の記入なし。
- ④アイデンティティ拡散：高校段階でなりたい職業に保育士が含まれるが、他にも2つ記入されている。あるいは高校時代の「なりたい職業」に保育士が含まれていない。さらに「なりたい職業」がない学生もここに入れた。結果はTable 1およびFigure 2の通りであった。

Table1 アイデンティティ・ステイタスの割合(数値)

アイデンティティ・ステイタス	% (実数：人)
①アイデンティティ達成	23.0 (6)
②モラトリウム	30.8 (6)
③フォークロージャー	0.0 (0)
④アイデンティティ拡散	46.1 (12)
計	100 (26)

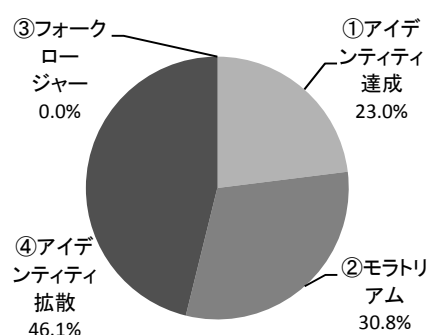


Figure2 アイデンティティ・ステイタスの割合 (図)

これらによると、「保育士になる」とことをしっかり心に決めた状態（アイデンティティ達成）で入学した学生は2割を少し超す程度であった。他の学生は保育系に入学したもの、まだ保育士以外の職業にも関心があってどちらになりたいのか決められない状態（モラ

トリウム）だったり、さらには何になりたいのか当人にもさっぱりわからない状態（アイデンティティ拡散）だったりしていることが明らかとなった。なお、幼い時から一貫して保育士に憧れてきたという学生（フォークロージャー。早期完了）は見いだされなかった。保育士は幼い頃から女の子に一貫して人気職業だという調査結果（クラレ、2014 他）から見ると、幾人かでもフォークロージャーが見いだされることが予想されたが、実際には今回の保育系学生の中に1名もいないという意外な結果となった。

モラトリウムとアイデンティティ拡散が多かった（合計 76.9%）理由として、以下の二つのことが考えられた。(a)時間不足：将来の職業について真剣に考えるにはまだ十分な時間が取れないまま進路決定時期が来てしまった。(b)職業の多様化：現代の日本においては職種は増える一方であり、その中から選ぶのは大変難しくなってきた。(c)上の2つ両方。

なお同じ質問を他の2コースにも行ったが、「栄養士」「養護教諭」という職業自体幼い子どもの夢にはなにくかったようで、彼女らの回答からアイデンティティ・ステイタスを分析することは出来なかった。

(2) 保育ボランティアおよび職場体験と保育士志望の関係

中学校時代あるいは高校時代の、保育ボランティア経験あるいは保育園／幼稚園での職場体験の有無と、その経験が保育系進学のかきかけとなったかについて尋ねた。その結果はTable2通りである。

Table2 保育ボランティア／職場体験と保育系進学との関係

経験あり	64%(16人)	きっかけになった	93.8%(15人)
		きっかけにはならなかった	6.2%(1人)
経験なし	36%(9人)		

これによると学生の64%が何らかの経験をしており、経験者のほとんど(93.8%)がこの経験が保育系進学のかきかけとなったと答えている。「(これらを)経験したがきっかけとはならなかった」と答えた唯一の学生にインタビューをしたところ、「中学校時代から保育士とは別の職業を目指しており専門学校にも合格していたが、母親の意向で方向転換せざるを得なかった」と保育士に関心を持ってない気持ちを語ってくれた。

アイデンティティ・ステイタスとの関係は以下のTable3の通りで、アイデンティティ・ステイタに関らず、ボランティアや職場体験が「保育系進学」と結びついたことがわかる。

Table3 保育ボランティア／職場体験とアイデンティティ・ステイタスとの関係

アイデンティティ・ステイタス	実数(人)	保育系進学のかつかけとなった(人)
アイデンティティ達成	3	3 (100.0%)
モラトリアム	5	5 (100.0%)
アイデンティティ拡散	8	7 (87.5%)
計	16	15 (93.8%)

保育ボランティアや園での職場体験がこれほどの力を持つのはなぜだろうか。ひとつには、学生（経験時は高校生）が高校の用意した多種のボランティアや体験の中から「子ども」と触れ合うものを選んだのであるから、もともと子どもに関心があり、この気持ちと具体的体験とが結びついて一挙に「保育系進学へ」と進んだということかもしれない。また、学生の経験の範囲が狭く貧しいので、たまたま得た経験が大変刺激的であり、一挙に「保育系進学へ」と進んだのかも知れない。

(3) 進学先の決定に影響を及ぼした人物

進学先を決定する際に影響のあった人物を最大3人まで記入することを求めたところ、Table4の通りの結果であった。影響力の大きかった人物は、高校教諭と母親と友人、そして父親である。全体を見ると母親が最も影響力を持っていた。これは、女性である母親が同じく女性である高校生の娘に、女性同士としてのアドバイスをするということが多かったためではないかと想像できる。また、保育士コースでは、他の2コースよりも高校教諭の影響が大きかった。これは、待機児童・保育士・幼保一元化など保育関係の事柄が新聞を賑わすことの多い現在、進路指導担当の高校教諭が「将来性のある仕事」として高校生に保育士志望を進めた結果かも知れない。

Table4 進学先の決定に影響を及ぼした人物

コース	第1位	第2位	第3位
保育士 (記入あり 21人)	高校教諭 61.9% (13人)	母親 52.4% (11人)	父親 23.8% (5人)
養護教諭 (16人)	母親 68.8% (11人)	高校教諭 43.8% (7人)	友人 31.3% (5人)
栄養士 (12人)	母親 66.7% (8人)	高校教諭 41.7% (5人)	友人 16.7% (2人)
全体 (49人)	母親 61.2% (30人)	高校教諭 51.0% (25人)	友人 14.3% (7人)

(注) 全体で「父親」は第4位 10.2% (5人) であった

(4) 3歳児神話の受け止め方

「3歳までは母親の手で」という考え方に対して、賛成か反対か、あるいはどちらでもないかを選択をすることを求めた。コース別の結果はTable5の通りであり、保育士コースと他の2コースとの間に大きな違いが見られた。養護教諭コースと栄養士コースでは「賛成」が6割以上占めているのに対し、他方、保育士コースでは7割以上の学生が「どちらともいえない」を選ぶという結果であった。

養護教諭コースと栄養士コースの学生たちは、迷うことなく「3歳までは母の手で育てるのが良い／育てるべきだ」と考えているように思われる。自身の母親がモデルなのか、それが常識であると考えて来たのか、あるいは、自分の母親が忙しい仕事を持っていたために寂しい思いをしたという思い出もあるのかも知れない。様々なことが想像される。専業主婦願望も底にあるのかも知れない。

一方、保育コースの多くの学生は「3歳までは母の手で」という考え方について「賛成」ではないが「反対」でもない、つまり明らかに迷いがある。どのように優れた保育士であっても「子どもの母親」ではない。もし学生があるいは保育士が「3歳児神話」を事実であると信じるならば、保育士の役割はいったい何なのか。保育士として自らを高めるとはいったい何を高めるのか。「3歳児神話」を突き詰めると、こういった悩みに直面せざるを得ない。入学して3か月の保育系学生たちは、まだ明確に意識に上らずとも薄々感じるところがあって「どちらともいえない」を選択したのではないかと思われる。しかし保育士コースと他の2コースの学生たちは、そもそも入学前から考え方が違っていたという可能性も捨てきれない。今回は賛否の理由を尋ねていないので、コース間の反応差の原因を追求するのは次の機会に譲りたい。

Table5 「3歳児までは母親の手で」に対する賛否

コース	賛成	反対	どちらともいえない	計 % (人)
保育士	26.9 (7)	0 (0)	73.1 (19)	100.0 (26)
養護教諭	62.5 (10)	6.3 (1)	31.2 (5)	100.0 (16)
栄養士	66.7 (8)	0 (0)	33.3 (4)	100.0 (12)
全体	46.3 (25)	1.8 (1)	51.9 (28)	100.0 (54)

(5) 保育系学生になるための準備性

保育系学生として入学するにあたって、入学前のピアノ経験と学習習慣が重要であると考えた。なぜこの2つを取り上げたかを、まずピアノ経験から述べる。保育系学生にとってピアノは必須であり、しかも短大

ではわずか2年で現場に通用する力を付けなければならないからである。これは入学後の、音楽担当教員と学生本人の両者の大きな努力によって達成される、あるいは達成されるべきものであるが、ピアノのように経験時間が大きく物を言う学習では出来る事ならば事前の準備があった方がよい。

保育園あるいは幼稚園の現場ではピアノ演奏が必要であり、そのため保育士養成施設ではピアノ演奏を学ぶことが必須となっていることは高校生にもかなり広く知られており、現に入学試験の面接ではピアノのことを話題にする受験生が多くみられた。そしてその多くはピアノ学習についていけるかどうかという不安に関するものであった。

次に学習習慣について述べる。保育系短大の学生は忙しい。必須科目がそもそも多い上に、講義系科目、実技系科目、授業時間外の課題、ピアノ練習と、するべきものはたくさんある。そこでは、学力以上に学習習慣が重要となる。

このような観点から、保育系学生になるための準備性としてピアノ経験と学習習慣を取り上げた。

①ピアノ経験

A短期大学では保育士コースの学生募集にあたってピアノ経験を問わないので、初心者で入学しても何ら差し支えはない。しかし入学すればピアノ学習が必須となるので、初心者には入試面接において「入学前に少し準備をしておいた方がよいのではないか」と示唆している。A短大の場合、入学試験には様々な形があり（AO入試、指定校推薦入試、一般推薦入試、一般入試、センター試験入試など）、最も早く結果の出るタイプの入試では高校3年生の秋の初め頃に、主力となる推薦入試受験生の場合は秋が深まった頃に合格が決まる。いずれにせよ入学までには4～6か月間の時間的余裕がある。この期間にどのような準備がなされたのか、あるいはまったくなされなかったのかを、入学前に音楽担当者が行った聞き取り調査から確かめた。これによると入学予定者のうち入学前に何らかのピアノ経験があった者は57.7%（26人中15人）であり、まったくピアノを弾いたことの無い初心者は42.3%（26人中11名）であった。この結果、6割弱の入学者は、子どもの頃からもしくは入学が決まってからピアノの準備をしているが、残り4割強の入学者は時間的余裕があったにも関わらず、全くピアノの準備をしないで入学したことになる。

②学習習慣

高校時代の家庭学習について3コースの学生に尋ねたところ、結果はTable6の通りであった。保育士コースでは26人中11人が「まったくしなかった」と答え、8人が「30分以内」と答えている。どのコースの学生

Table6 高校時代の家庭学習時間（3コースの比較）

コース	全くしなかった	30分以内	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間未満	3時間以上	計
保育士	42.3 (11)	30.8 (8)	7.7 (2)	15.4 (4)	3.8 (1)	0.0 (0)	100 (26)
	73.1(19)						
養護教諭	25.0 (4)	18.8 (3)	37.5 (6)	6.2 (1)	0.0 (0)	12.5 (2)	100 (16)
	43.8(7)						
栄養士	33.3 (4)	25.0 (3)	16.7 (2)	25.0 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)	100 (12)
	58.3(7)						
全体	35.2 (19)	25.9 (14)	18.5 (10)	14.8 (8)	1.9 (1)	3.7 (2)	100 (54)
	61.1(33)						

も家庭学習の時間が多いとはいえないが、保育士コースの学生は他の2コースよりもいっそう家庭学習時間が短い傾向にあったといえそうである。

保育士コースでは、入学後の家庭学習時間（ピアノ練習を含む）は最低でも課題30分、ピアノ練習30分計1時間が必要である。この数値から言うと、「30分～1時間」あるいはそれ以上と答えた学生26.9%（26人中7人）は学習習慣という点からは一応入学の準備が出来ていたといえるが、「まったくしなかった」及び「30分以内」と答えた73.1%（26人中19人）の学生は、学習習慣という点から入学準備が出来ていなかったと言わざるを得ない。なお、全国の小・中・高校生の家庭学習時間（学習塾を除く学校外の学習）調査（2014、独立行政法人国立青少年教育振興機構）¹⁴⁾によると、高校2年生のうち「まったくしない33.9%」「1時間未満31.4%」、この2つを足すと65.9%となり6割以上の高校生の家庭学習時間は1時間未満となっている。最近の高校生は家庭学習をしなくなったといわれて久しいが（例えば、内田、2009¹⁵⁾）、あまり勉強していないと言わざるを得ない。しかしこの調査結果と比較しても保育士コースの学生の多くが学習習慣が出来ていなかったといえるだろう。

③準備性のまとめ

以上、保育系学生になるための2つの準備性として「ピアノ経験」と「学習習慣」という2つの事柄についてみてきた。その結果、ピアノ経験と学習習慣の準備の状態をまとめると、以下のTable7及びFigure3の通りであった。

Table7 保育系学生になるための準備性1 (単位%と実数)

準備	出来ている	出来ていない	計
ピアノ経験	57.7(15人)	42.3(11人)	100(26人)
学習習慣	26.9(7人)	73.1(19人)	100(26人)

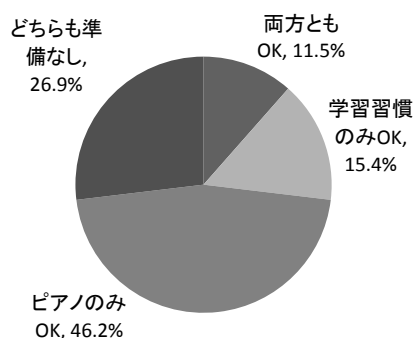


Figure3 保育系学生になるための準備性2

準備性という面からみると、ピアノと学習習慣の両方とも準備の出来ていた学生(11.5%、26人中3人)はさほど心配がないといえる。しかし、どちらの準備も出来ていなかった学生(26.9%、同7人)については、かつてない努力を強いられてがんばっているわけであり、この中で「努力する力」を獲得していくのか、あるいはふとしたきっかけで保育士という夢をも投げ出してしまうのか、大変気になるところである。

アイデンティティ・ステータスとの関係から見ると、ピアノと学習習慣の両方とも準備の出来ていた学生は「アイデンティティ達成」2名、「拡散」1名、どちらも準備出来ていなかった学生は「達成」1名、「モラトリアム」3名、「拡散」3名であった。しかし実数がありにも少ないので、この結果から特に言えることはない。

5. おわりに

保育系学生の「保育士志望」の背景を探る目的で調査研究を行ったところ、いくつかのことが明らかとなった。

①保育系学生は「保育士になること」少なくとも「保育士資格を取得したい」という希望を持って入学して来る。しかし2つの点で準備が不十分な学生が多いことが分かった。1つ目は、自分の人生の仕事として「保育士」を真剣に考えるまでの段階に至っていない。これはアイデンティティ・ステータスの分析から導かれた。2つ目は、保育の学習をするだけの準備が整っていない。これはピアノ経験と学習習慣の両者から見いだされた。

②中・高校時代の保育ボランティアや保育園／幼稚園職場体験は中・高生の進路決定に対して大きな影響力

を持ち、保育系短大進学のかきかけとなっていた。

③保育系を選ぶにあたって影響のあった人物は、高校教諭、母親、父親の順であった。

④「3歳までは母の手で」といういわゆる「3歳児神話」について、保育系学生は他コースの学生よりも深く考えようとしているが、まだどう考えたらよいのか迷っている。これは入学後に受けた教育(例えば保育学、社会的養護、発達心理学などの授業)と関係しているのかも知れない。

6. 今後の課題

今回は調査期間が限られていたため、被検者数が十分でないことが残念であった。ぜひ被検者数を増やし、今回見られた結果が普遍的といえるのかどうか確認したい。

また「3歳児神話」への反応が学生の専攻によって大きな差があることが分かったので、この差の背景にあるもの追求することが必要であろう。

今回の研究から、同じように保育系学生といっても保育士という職業に対する覚悟の程度(アイデンティティ・ステータス)や入学までの準備性に大きな差があることがわかった。この差が時間と共にどのように広がるのか、あるいは縮まるのか、追跡調査の必要があると思われる。

引用文献

- 1) 株式会社クラレ 2015年版新小学1年生の「将来就きたい職業」、親の「就かせたい職業」 2015.4
- 2) 株式会社クラレ 2014年版小学6年生の「将来就きたい職業」、親の「就かせたい職業」 2014.4
- 3) ベネッセ教育総合研究所 第2回子ども生活実態基本調査 2009
- 4) 13歳のハローワーク公式サイト
<http://www.13hw.com/home/index.html> 2015.6.20
- 5) 総務省統計局 賃金構造基本統計調査 平成22年賃金構造基本統計調査 一般労働者 2011
- 6) Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality & Social Psychology, 3, 551-558. 1998 鎌 幹八郎(編)「アイデンティティ・ステータス」の開発と確定 アイデンティティ研究の展望5-1 ナカニシヤ出版
- 7) Erikson, E. H. 1950 (2nd enlarged ed. 1963) Childhood and society. New York: Norton. 仁科弥生(訳) 1977, 1980 幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ みすず書房
- 8) 無藤清子「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187. 1979
- 9) Harlow, H.F. 1958 The nature of love. American

Psychologist, 13, 673-685.

- 10) Harlow, H. F. 1971 Learning to love. San Francisco, CA: Albion. (ハーロウ, H. F. 浜田寿美男 (訳) (1978) . 愛のなりたち ミネルヴァ書房)
- 11) 大日向雅美 母性の研究--その形成と変容の過程:伝統的母性観への反証 川島書店 1988
- 12) 日本子ども学会(編) 保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から 菅原ますみ・松本 聡子 (翻訳) 2009
- 13) 厚生労働省研究班 (代表: 安梅勅江) 夜間保育の子どもへの影響及び今後の課題に関する報告書 2000
- 14) 独立行政法人国立青少年教育振興機構 青少年の体験活動等に関する実態調査報告書 平成 24 年度調査 2014
- 15) 内田樹 下流志向ー学ばない子どもたち 働かない若者たちー 講談社 2009